

インドネシア・スマトラにおけるアブラヤシ農園開発の土着化・内延化 Indigenization and Internalization of Oil Palm Plantation Development in Sumatra, Indonesia

永田 淳嗣^{1*}, 新井 祥穂², グラット M. マヌルン³
Junji NAGATA^{1*}, Sachiko ARAI², Gulat M. MANURUNG³

¹ 東京大学人文地理学教室, ² 東京農工大学農学研究院, ³ リアウ大学農学部

¹Department of Human Geography, The University of Tokyo, ²Tokyo University of Agriculture and Technology, ³Faculty of Agriculture, The University of Riau

インドネシア外島部では、過去 30 年間にアブラヤシ農園が急激な拡大をみせ、とくにスマトラやカリマンタンなどの地方社会の社会経済発展や資源利用のあり方に大きな影響を与えている。こうした現象は、中国・インドの経済発展やバイオディーゼル需要の増大により世界の油脂価格が高水準で推移する中で、東南アジアの経済発展で蓄積された資本が、インドネシア外島部の低湿地や丘陵・山岳地帯などの開発フロンティアに流れ込んだことによる。2000 年代後半には、インドネシアはマレーシアを抜き世界最大のアブラヤシ生産国となった。この急激な拡大は、インドネシア外島部の社会経済発展のあり方に深く広範な影響を与えると同時に、広大な熱帯雨林の消失を引き起こしてきたため、開発と環境をめぐる様々な問題を提起し、広く国際社会の注目を集めるに至っている。

しかし、こうしたアブラヤシ農園拡大過程をつぶさに観察すると、ポスト・スハルト期以降(1990 年代末?)、以下のような重要な変化が生じている。第 1 に、農園開設の許認可の権限が、中央政府から地方政府に大幅に委譲されたため、地方政治や地方社会の状況が、アブラヤシ農園拡大過程に与える影響が格段に増している。第 2 に、大農園に対し小農の比重、特に移住政策によるジャワからの移民や農園労働者としての伝統的農園地域からの移住者ではなく、政治的経済的権利に目覚めた地元小農の比重が高まっている。第 3 に、アブラヤシ生産の拡大に際して、未開発の森林を対象とした外延的拡大に限界が見え、既開発地(旧ゴム農園や旧森林伐採地も含む)の再配分や再開発、集約的利用に関心が移行している。

筆者らは、こうした変化を「土着化・内延化」という概念でとらえ、その実態を精査する作業を通じて、アブラヤシ農園の拡大過程とインドネシア外島部の社会変容との関係を、社会層分化の実態や、各社会層の生産力構造と生産関係、様々なスケールでの政治経済力学の解明を通じて実証的に明らかにしたいと考えている。

*本研究には、平成 24~26 年度科学研究費補助金(基盤研究(B) 課題番号 24401008)『インドネシアのアブラヤシ農園拡大過程の変容 - 土着化・内延化と社会層分化』(代表 永田淳嗣)を使用した。

キーワード: インドネシア, スマトラ, アブラヤシ, プランテーション

Keywords: Indonesia, Sumatra, oil palm, plantation